

私は文化人類学者として、フィリピンの島々に 25 年近く通い、フィールドワークを続けている。呪術師の儀礼で祈り歌い踊り、深海でダイバーと凍えながらレアな魚群を待つ。そんな話をすると「遠い世界の話ですね」と驚かれることが多い。

だが、異文化との遭遇はもっと身近な場所にも潜んでいる。私にとって最も手強い「他者」、それは今月で推定 9 歳を迎える黒猫の「ハツ橋」だ。9 年前、京都で保護された彼女を大切なお土産のように連れ帰って以来、我が家は毎日がスリリングな調査地となった。

人類学者はフィールドに長期滞在し、その土地の言葉を習得して調査を行う。しかし、相手が猫となると一切の言語が通じない。だからこそ、尻尾の角度や鳴き声の微細な差異から彼女の感情を読み取ろうと、毎日血眼になって参与観察を続けることになる。

すると、人類学者特有のやや面倒な思考が動き出す。私は彼女を完全室内飼いにしているが、これは「安全」の名を借りた人間中心主義的な空間の囲い込みではないか？ 君は、本当は外を駆け回りたいのではないのか？ 良かれと思った介入が、一方的な支配構造に陥ってしまう。この葛藤は、人類学が批判的に向き合ってきた植民地主義の暴力性にも直結する重い問いでもある。

完全にはわかりあえない相手と、それでも関係を築き共に生きていくために力を注ぐこと。それは最近映画化もされた SF『プロジェクト・ヘイル・メアリー』の未知の知性体との遭遇にも似て、途方もなく、だからこそ面白い。最近シニア期に入った彼女のケアを通じ、お互いの健康を祈りつつ、今日も双方にとって快適な生活を模索している。

日常にいる「他者」とのわかりあえなさを引き受け、困難だと知りながら共に生きる道を探求する。今夜も隣でブランケットを奪い安らかに眠る彼女に、「幸せかい？」と尋ねかける。猫と暮らす人類学者の悩みはまだ続く。

東 賢太朗 教授



「ハツ橋、君は幸せですか？」

私は 19 世紀フランスの女性作家ジョルジュ・サンドを研究しています。彼女は、日本では音楽家ショパンの恋人として知られていることが多いですが、その一面だけで語るには実にもったいない人物です。

サンドが生きたのは、フランス革命後、王政復古、七月革命、二月革命と、社会が大きく揺れ動いた時代でした。女性が自分の生き方を選ぶことが難しい中で、サンドは作家として生計を立て、結婚や恋愛、社会などについて自らの考えを発信し続けました。

そんなサンドが、生涯で書いたとされる手紙は実に 2 万通以上と言われています。家族や友人だけでなく、作家や芸術家、政治家と交わした手紙には、小説だけでは見えてこない彼女の考えや悩み、喜びが残されています。手紙と向き合い、「この人は何を考えていたのだろう」とたどっていくと、国も時代も異なる一人の人間が、少しずつ身近に感じられてきます。

そして面白いのは、そんな彼女を知ろうとすると、高校の授業で習ったことが少しずつ立体的に見えてくることです。「1789 年のフランス革命」「ルソー」「共和主義」一かつてテストのために覚えていた年号や用語が、単なる歴史上の出来事や人物ではなく、その時代を生きた人々の葛藤や選択と結びついて浮かび上がってくるのです。

今年 2026 年はサンドが亡くなってちょうど 150 年。この機会にぜひあなたもサンドの見つめた世界に触れ、その人生をたどってみませんか？

渡邊菜月 博士後期課程 2 年



オーギュスト・シャルパンティエ「ジョルジュ・サンドの肖像」1838 年、パリ ロマン主義博物館
画像:Paris Musées / Musée de la Vie Romantique (CC0)

「考古学」という学問のイメージはどのようなものでしょうか。帽子をかぶって発掘をする光景、土偶やピラミッド、土器や古墳など様々なものが考えられます。

まさにこのようなイメージのとおり、考古学では、過去の人類関わった物質を研究対象とします。その目的は、過去の社会や人類について明らかにすることです。

私は、屋根瓦を通して古代寺院の研究をしています。世界最古の木造建築である法隆寺や、2026 年 7 月ユネスコの世界文化遺産となった「飛鳥・藤原の宮都」の時代です。この頃、日本列島各地でも寺院造営が行われ、7 世紀後半までに 600 以上の古代寺院が発見されています。私は特に、当時の都から離れた地方の寺の瓦を研究しています。ここでは瓦作りに必要な人・モノが不足しがちな地域でどのようにたくさんのお寺を造ることを可能にしたのか、について、モノに即して考えます。

ところで、文様がつく瓦を「軒瓦」といい、時代ごとのトレンドにある程度則って作られるのですが、時折古いトレンドをまねた瓦が現れます。これは、古代の中だけではなく、古代の瓦をまねて中世から現代にいたるまでときどき見られる現象です。

私たちの身近にも、土偶や埴輪などをモチーフにしたかわいらしい小物があります。私たちは、お？と目を引かれますが、日常にありふれた光景ですぐに忘れ去ってしまいます。しかし、その裏には、デザイン、製作、流通にたくさんの人・モノが隠れています。

“古物好み”に限らず、過去の人々にとってなんでもないことにスポットライトを当てると、当時の社会の一面が垣間見える。現代にありふれた自分と重ねあわさって、少しうれしい気持ちになります。私の考える考古学の魅力の一つです。

三谷聡大 博士前期課程 1 年



平城宮所用瓦(復元) 写真:三谷撮影



月刊 名古屋大学文学部

第
154
号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
Koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2026 年 11 月 10 日発行